

要旨

水海道方言は子音の有声性に関して有声化と無声化の両方が存在する。両者が生じる文法構造は部分的には重複するものの異なる部分がある。単語の内部では両方の有声性交替が見られるが、単語と助詞の間では有声化のみが生じる。この発表では、連濁との関係も視野に入れ、水海道方言における文法構造に規定された音韻現象の相互作用の分析を示す。

1. はじめに

- ・水海道方言とは
旧・水海道市（現・常総市）を中心とする地域（茨城県南西部）で話されている方言。
- ・位置づけ
3分類では、西南部方言の一つ（宮島 1961）Cf. 北部、南部
6分類だと、県南西方言の一つ（県北、浜言葉、県中央、霞ヶ浦・北浦周辺地区、利根川流域（読売新聞編 1967『茨城の民俗』鶴屋出版部））
→茨城県内で話されている方言は、語彙の面でも文法体系の面でも多様である。水海道方言は決して茨城県の方言を代表する方言ではない。
- ・目標は二つ

- (1) a. この方言の文法構造と音韻現象を概観し、他の茨城県内の方言で異なる特徴が予測される部分の見通しを立てる。
- b. この方言の文法構造と音韻現象に関して解明されていない点を明らかにし、この研究プロジェクトで明らかにすべき点を明確にする。

資料

Sasaki (2008)の抜き刷り
佐々木(2011)のコピー (資料 1, 図書館で買っただけだと助かります)

2. 前提

2.1. 言語体系と言語変化

- ・特別な指定がない限りここでいう「方言」は伝統方言を指すものとする。
- ・若年層への継承という変化の側面も重要。これについては後述。

2.2. 形態統語論上の単位について

- ・文、句、単語
日本語の統語的な構成素に関して問題となるのは、動詞句という単位を認めるか否かという点である。ここでは、さしあたりこの問題を扱わない。

・単語、助詞、接辞

日本語における接辞と助詞の区別は、必ずしも明確ではない場合があることが指摘されている (Vance 1993)。確かに助詞は単語と接辞を両極と

する連続体の中間に位置づけられるものである以上、そうした側面はある。それ故に、さまざまなテストによって助詞か接辞かを区別することは重要である。

しかし、ここでは、暫定的に、名詞に関しては伝統的に助詞と見なされてきたものを助詞とし、動詞に関しては、終助詞や接続助詞とされてきたものを助詞と見なし、それ以外の要素は接辞として扱うことにする。これは、有声性交替の範囲などを理解する上で役立つ。

・文法関係と格

文法関係と格は一対一で対応しない。主語は必ずしも主格で現れるとは限らない。この発表では、表層的な統語論上の単位として斜格主語というもの認める立場に立ち、それを受動文の斜格動作主と区別する。

3. 水海道方言の形態統語論上の特徴

3.1. 名詞句の特徴

3.1.1. 格体系

資料 1. p.102 の表 1 を参照。

例文は、資料 1. pp.105-106 参照。

- ・分裂対格型：有生名詞では、主格と対格が形式的に対立し、対格の側が、プラスアルファである。一方、無声名詞の場合、主格と対格は同形である。
- ・斜格における文法関係の対立：間接目的語を表す格助詞と斜格主語を表す格助詞が形式的に異なる。
- ・斜格経験者固有の格形式の存在は、通言語的に珍しい特徴。他に確認できるのは、コーカサスのいくつかの言語ぐらいである (Kibrik 1996 参照)。Kibrik (1996)が記述したゴドベリ語は能格型言語。対格型では水海道方言だけ？

[他の方言を調査する上でのポイント]

- ・対格の形式 (有生性による使い分けか？ それ以外の要因が関与するか)
- ・与格における有生格 (ゲ) と無生格 (サ) の対立、「ゲサ」「ゲニ」？
- ・経験者格の有無
- ・連体修飾格の対立

3.1.2. 派生接尾辞

- ・ 人を表す「テ」: tonarinte 「隣の人」
- ・ diminutive の「メ」: 小動物につける「メ」(例: 蛇[hemme]) は、筆者が調べた範囲では、水海道方言では使わないようである。

3.2. 述語に関連する特徴

3.2.1. 活用

	四段活用	一段活用	サ変	カ変
未然形	kag-a	mi	s-i	k-i
連用形	kag-i	mi	s-i	k-i
過去形	kae-da	mi-ta	s-j-ta	k-j-ta
終止形	kag-u	mi-ru	s-u-ru	k-u-ru
已然形	kag-e	mi-re	s-u-re	k-u-re
命令形	kag-e	mi-ro	s-i-ro	ko:

- ・ カ変動詞における未然・連用同形
- ・ 形容詞における未然形と連用形の分岐
- ・ ラ行四段活用の未然形で撥音便 (toN-ne:)
- ・ ガ行五段動詞 ([ŋ]で終わる語根) の音便: エ音便か撥音便か?

3.2.2. アスペクト

- ・ 「チャウ」の前に現れる促音←3.2.7 参照

3.2.3. 時制

- ・ 「タ」だけでなく「ケ」も

samig-aQ-ta

sami-Qke=na

3.2.4. 態

・ 態の種類は、標準語と基本的に同じ。ただし、形式には違いあり (-rase)。

受動: -rare (kag-are / ange-rare)

使役: -rase (kag-ase / ange-rase)

可能: -e/rare (kag-e / ange-rare, ラ抜きは確認できていない。ある調査協力者は強く否定)

- ・ 逆使役の欠落 (他の方言も完全に同様か? 特に北西)

東北地方や北海道の方言に特徴的な生産的な自発述語形成はこの方言にはない。なお、自発形態法を使った逆使役型の自動詞化は、栃木県の方言では確認されている (加藤 2000)。

3.2.5. 接続助詞

- ・ 標準語にはない「つくれ」(条件)

ame huQ-ta=Qkure uzi=ni i-Q=kamo sin-ne:=ja

3.2.6. 終助詞

3.2.7. 否定

- ・ (単純) 否定と否定推量の区別

kaga-ne: (単純否定)

kaga-me: (否定推量)

- ・ 否定と完了アスペクトの「チャウ」の前後関係

kua-ne:=QtsjQ-ta. (ない+ちやう)

kuQ-tsja:-nag-aQ-ta (ちやう+ない)

- ・ 「～するまえ」=「～シネエメエ」

ame huN-ne me:=ni uzi=sa he:Q-ta

雨が降る前に家に入った。

3.2.8. モーダルな要素

3.2.8.1. 助詞によるもの

- ・ 対事モダリティ: 「べ、っぺ」(「へ」がある地域も)

- ・ 対人モダリティ:

3.2.8.2. 人魚構文

- ・ 標準語にはない項目

「～スル縁起ダ」(～する習慣になっている)

emo jae-de ku: eNngi=da

「～シタ割合ダ」(いつもより～した)

ezumo=jori kuQ-ta warie:=da

「～スル席ダ」(～する立場だ、権利がある)

iQ-te=mo kamane: segi=da

ora tema mora: segi=da

- ・ 「～スル縁起ダ」構文はその土地の風習を聴く上で役立つ。

3.3. 格と文法関係

- ・ 基本的に対格型
- ・ ただし Surface Case Canon は成立しない。

資料 1. p.105 (3)

4. 音韻現象

4.1. 音素目録

Sasaki (2008), p.87 (2)

4.2. 分節音に関わる音韻現象

4.2.1. 狭母音の無声化

- ・ 無声阻害音に挟まれた狭母音が無声化する点は標準語と同じ。
- ・ ただし、狭母音に先行する阻害音が基底で有声の場合がある。

4.2.2. 阻害音の無声化

Sasaki (2008), pp.94-96

- ・ [ŋ]が無声化を被らない→明らかに表層的な現象
- ・ 単語の内部でしか生じない。

4.2.3. 母音間閉鎖音の有声化

[−cont]→[+voice]/V__V

/kata=kara/ [kada=gara] (肩から)

/nihoN=kara/ [nihoN=kara] (日本から)

- ・ 単語の内部だけでなく、単語と助詞の境界でも生じる。

/zikaN/ [zigaN] (時間)

/ni-zikaN/ [ni-tsjkaN] (2時間)

- ・ 無声化と有声化の両者が条件を満たす場合は、無声化が優先される。

4.2.4. 連濁と硬化

連濁: Sasaki (2008), pp.89-90

硬化 : Sasaki (2008), p.86

Sasaki (2008)の分析のまとめ

硬化 (s→ts: sjkage~banetsjkage; h→p: htoN~zptoN) は、阻害音の無声化と連濁、そして関連する音韻現象である p→h および持続性の中和の不透明な相互作用の結果である。この現象は、完全に並列的な分析では扱いきれない。連濁と p→h が活性化しているレベルと阻害音の無声化が活性化しているレベルを分け、前者が後者に先行する音韻論を想定する必要がある。

このレベル分けは、茨城の方言の「関東の東北方言」という位置づけを反映したものである。関東的なレベルと東北的な（阻害音の有声化や母音間閉鎖音の有声化が生じる）レベルの共存は、音韻論に固有のものではない。文法構造にも見られる。

4.2.5. 前舌狭母音の半狭母音化 (lowering) と /ju/→[i]

- ・子音が先行しない/i/は[e]になる。

参考文献

加藤昌彦 (2000) 「宇都宮方言におけるいわゆる自発を表す形式の意味的形態統語的特徴」『国立民族学博物館研究報告』25-1. 1-58.

Kibrik, Alexandr (1996) *Godoberi*. Munchen: Lincom Europa.

宮島達夫(1961)「方言の実体と共通語化の問題点6 福島・茨城・栃木」『方言学講座第2巻 東部方言』東条操監修. 236-63. 東京堂出版.

Sasaki, Kan (2008) Hardening alternation in the Mitsukaido dialect of Japanese. *Gengo Kenkyu* 134: 85-118.

佐々木冠(2011)「水海道方言：標準語に近いのに遠い方言」『日本の危機言語』呉人恵編. 99-136. 北海道大学出版会.

- ・ ju --> i (まれに jo, cf. jo:mazi (リュウマチ))
- ・ counterfeeding opacity
- *gju:nju:, gi:ni: (牛乳)
- *juzu, izu, *ezu (ゆず)

4.3. 実は調べていないこと

- ・ 実は、語彙的にアクセントが示唆的でないことを理由にアクセントを全く調べていない。
- ・ 複合語アクセントや文レベルのプロソディーはもちろん調査に値する。

5. 若年層における伝統方言の継承

- ・ 述部の文法要素 > 名詞句の文法要素 > 語彙、音韻

資料 1. pp.126-152.

6. まとめとお願い

- ・ 文化庁のプロジェクト「東日本大震災と方言」への協力を (できる範囲で)